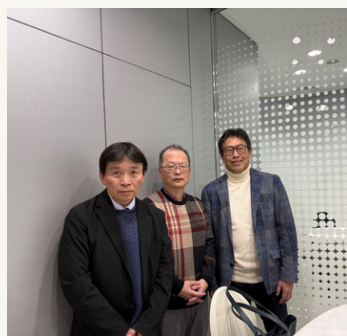


AI×社労士から起こる、社労士業界のAI革命

HALZは「AI×業務設計」を掲げ、テクノロジーによる士業の変革を支える理系人材の採用に注力してきました。そんな折、同じ新宿の「東京国際工科専門職大学」から実習受け入れの打診を受けます。

同大学は現場実習を柱とする、実践重視の専門職大学です。AIによる業務改革を推進するHALZと、AIを活用し学ぶ学生たちが実務の核心で交わるこの教育方針は、双方の挑戦的なビジョンと深く共鳴しました。



受け入れにあたっては、相互理解を深めるための説明会兼面談を実施。応募総数は10名にのぼりましたが、今回は先着順で意欲的な3名の受け入れを決定しました。また、藤田CEO自らも近未来的なキャンパスを訪れ、教授との対話を通じて教育理念と実務レベルの擦り合わせを行い、強固な連携体制を確認しました。

理系学生の論理的思考が現場に化学反応を起こすと確信し、受け入れを正式に決定。新宿を舞台に、士業の前提を壊す新たな共創が始まりました。

1月から東京国際工科専門職大学の学生3名がHALZの特別プログラムに参加しました。その様子や成果を4本に分けてお送りするので、最後までご堪能ください！

1本目となる今回は、プログラムの紹介と、このプログラムを立ち上げた、株式会社HALZ取締役社長・橋本朋美さんへのインタビューをお送りします！

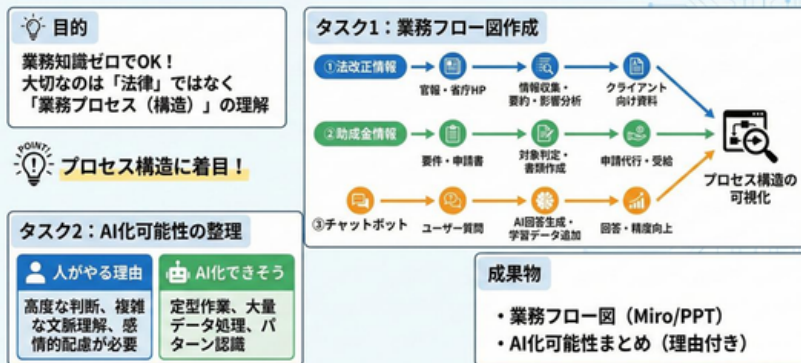
-SCHEDULE-

- ★ 1. プログラム紹介&橋本さんインタビュー
- 2. 阜山さん実習成果&インタビュー
- 3. 橘さん実習成果&インタビュー
- 4. 吉本さん実習成果&インタビュー

プログラム紹介

Week 1 | 理解・構造化 (Understanding & Structuring)

テーマ：「社労士業務」の構造をハックする



1週目は社労士業務について理解してもらうため、業務フロー図を作成しました。また、AIに任せるべきこと、人が判断するべきことをそれぞれ考え、AI化の可能性の整理を行いました。

2週目はエンジニア視点とソリューションとしての設計者視点を養うため、AIによるリスクを交えた設計図を作成しました。

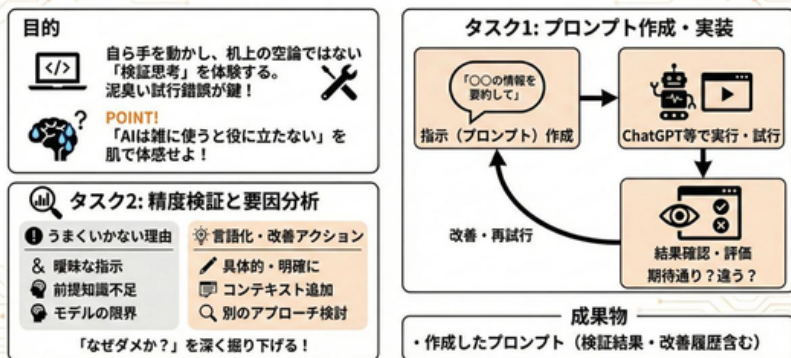
Week 2 | 設計・リスク検討

テーマ：AI活用の「設計図」を描く



Week 3 | 実装・検証

テーマ：手を動かして「検証思考」を学ぶ



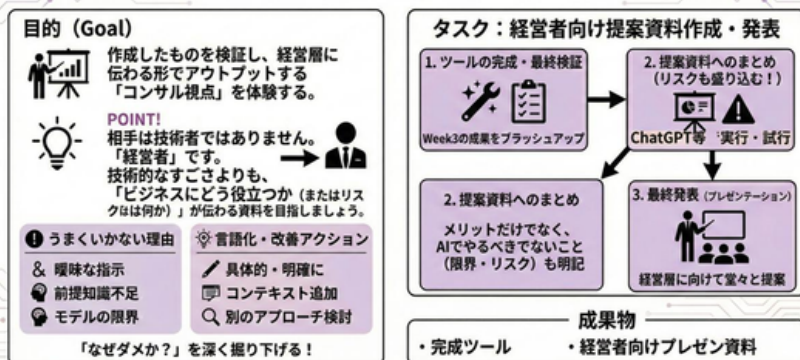
3週目は2週目で作成した設計図を基に、AIを活用して検証を繰り返しました。

最終週では、経営者に伝わるコンサル視点を持ち、これまでの成果を発表・提案を行いました。AIが実務にどう活かせるのか、どんなリスクがあるのかが明確に伝わるようにプレゼンをしました。

※参考：橋本さんが作成したプログラムより抜粋

Week 4 | 提案・発表

テーマ：コンサル視点で成果を伝える



このプログラムで得られるもの

業務×AIの設計視点

社労士業務を正しく理解し、その中にどのような課題があるのかを考えます。そのうえで、業務のどの部分にAIを活用すると効果的なのか、また逆に人が担うべき場面はどこなのかを見極め、業務全体を俯瞰しながらAIをどのように組み込むかを考える力を身につけます。

コンサル的思考プロセス

業務上の課題を抽出し、解決策を考え、形にしていく過程を通して、課題解決に向けた思考力を養います。

実務に近いアウトプット体験

期限までに成果を出すこと、そして自身の取り組みや成果を言語化し、相手に分かりやすく伝えるスキルを磨きます。

このプログラムは、実習生の自主性を尊重し、実務的なAI活用挑戦できることが強みです。自ら行動し、成果を出す良い経験になればと思います！by橋本さん



橋本さんにインタビュー

Q1. なぜこのプログラムを立ち上げたのですか？

就職活動を控える大学2年生を対象に、どのような取り組みであれば実習生にとって意味のあるものになるのかを考えました。単なる職場体験ではなく、何かしらの**成果物を作ることで、実習生とHALZの双方にとって価値のある経験**になることを目指し、今回のプログラムを立ち上げました。

Q2. 実習生の取り組みはいかがでしたか？

予想以上にプログラミングやAIに関する知識があり、それぞれが**自身のスキルを活かして主体的に取り組んでくれました**。当初はAIを活用した思考訓練を中心に行う想定でしたが、基礎的な知識が十分に備わっていたため、早い段階から実践的な開発に取り組むことができました。

Q3. このプログラムの強みは何ですか？

実習生の自主性を重視し、実践的なAI活用挑戦できる点です。一般的なインターンでは、社員の補助業務など通常業務の延長を行うことが多いと思いますが、本プログラムでは専門的な知識を持つ実習生だからこそ、自ら課題を見つけ、考え、成果を出す経験ができる点が特徴です。

Q4. 橋本さんにとって想定外だったことはありますか？

良い意味で想定外だったのは、**実習生のプログラミングやAIに関する知識が非常に高かったこと**です。プログラムでは基礎的な知識のインプットから始め、テーマもこちらから提示しましたが、テーマ設定の段階から実習生自身に考えてもらっても良かったかもしれないと感じました。

Q5. 実習生にとって難しいところは何ですか？

実践的に行動することや、**AIと人事業務を掛け合わせた発想を形にする点が難しかった**と思います。業務理解が不十分なままだと、何をすればよいか分からず一日が終わってしまう可能性もあるため、定期的に打ち合わせを行い、進捗を確認しながら進めました。実習生たちは受け身にならず、積極的に考え、改善案を提案してくれていました。

Q6. 今後もこのプログラムを実施するのでしょうか？また改善したい点があれば教えてください。

今後も実施したいと考えています。AIやプログラミングの知識を持つ実習生と関わることで、異業種交流のような刺激を受けましたし、この経験をきっかけに社労士の仕事に興味を持ってもらえれば、新たな可能性が広がると感じました。

改善点は社員とのコミュニケーションをより活発にすることです。今回は関わる社員が限られていたため、次は多くの社員と打ち合わせや意見交換を行う機会を設けて実習生・社員双方にとって、より学びの多いプログラムにしたいです。

成果発表会の様子
皆さんとてもよく考え、充実した4週間だったと思います。
お疲れ様でした！

写真左手から皐山さん、橘さん、
手前が吉本さん



編集後記

インタビューにご協力いただいた橋本さん、ありがとうございました。

このプログラムでは、実習生の主体性や吸収力の高さが存分に発揮されていたことが、橋本さんのお話からもよく伝わってきました。実習生の方々は、社労士業務という一見専門的な分野に対しても、業務理解から課題を見つけ、AIをどのように活用できるかを真剣に考える経験ができたのではないのでしょうか。この取り組みが、実習生にとって将来を考えるきっかけとなり、そしてHALZにとっては新たな可能性を広げる一歩になれば幸いです。

担当：小池